

今や、安倍晋三元首相暗殺事件の背景として指摘された世界平和家庭連合（FWPU）旧統一教会問題で、民放の地上波ワイドショーで引つ張りだこの紀藤正樹弁護士（全国霊感商法被害者対策弁護士連絡会事務局長代行）。その一挙手一投足に世間の耳目が集まっているようだ。右も左も関係なく、さながら「悪を糾弾する正義の体現者」のように周りには映っているようだが、実はそこに重大な落とし穴が潜んでいるのではないか。

さて、紀藤氏はツイッター等で自ら情報発信しているが、8月20日フジテレビ系放送の「ほんとうにあった怖い話 夏の特編2022」について苦言を呈している。

「ほんとうにあった怖い話」（通称「ほん怖」）は、1999年から不定期のスペシャル枠で放映されている「怪談」オムニバスドラマ仕立ての番組だ。「ほん怖クラブ」の小学生たちとMC進行役の元SMA P稲垣吾郎氏が、「肝試し」のように物語を鑑賞し、霊現象の意味などについて「霊能者」に解説を求め、最後に「弱気退散」で締めくくるといふ番組構成になっている。

紀藤氏はこの放送翌日に「この種の番組を放送するのは辞めてほしい。いまだに続いているのがわからない。霊感商法に利用されるだけです。テレビは事実に基づき報道すべき」と投稿。同番組では宗教家で霊能力者の下ヨシ子氏が出演し、ドラマに出てきた心霊

現象の解説を行った。

紀藤氏はツイートでさらに「本当に困りもの。フィクション／非科学的な話とするなら徹底す

べきで宗教法人の教祖を、心霊研究家、宗教家として演出する手法自体ミスリードイングで、放送倫理にも触れる可能性がありません」とし、強い口調で番組の「廃止」ともとれる発言をした。

確かに下氏にはいわゆる「霊感商法」による損害賠償の民事裁判で敗訴した経歴があるという。だが、かといって下氏に霊能力がないとかインチキだと断言できるものではない。それを言ってしまうは、占いや「開運グッズ」も霊感商法だ、占いが当たらないから金を返すのは当然という人間がどんどん増え、「死後の世界」や「靈魂」をペテンと決めつけ、殺伐とした世界観・人間観に支配されるだろう。

そもそも「宗教は民衆のアヘンである」（ヘーゲル法哲学批判序説）と言ったのはマルクスであり、共産主義者に共通する価値観であって、「科学的態度」ではない。人生の転機において、目に見えない超自然

的存在やそうした言説に影響を受けたりする人間は、世の中に少なくはない。それを精神的弱者が霊的と称する存在にすがろうとするのは騙されていると捉える向きも少なからずある。

だがそれこそは、価値観の一方的な押しつけではないのか。紀藤氏の主張だと、さながらジブリ映画の『となりのトトロ』で、姉のサツキが行方知れずとなった妹のメイを探すために大人には見えないトトロに妹を探してと懇願しに行く物語は、霊的存在を信じ込ませるから観るなということになるのだろうか。

このように、知らず知らずのうちに「宗教はアヘン」という唯物論的価値観の刷り込みが、僭越にもなされている危険性を、指摘しておかねばならない。

また一方で紀藤氏は、深見東州氏の開いた「ワールドメイト」における「被害相談」も受けているという。ところが、このワールドメイトが実は旧民主党（現立憲民主党）への献金額がすごいというのに、こちらについては紀藤氏は完全にスルーし自民党のみを批判している、という批判（Kaga知恵袋）がネット上で出回り始めた。さらには旧民主党には暴力団周りをして投票依頼していた国会議員がいたと元暴力団関係者が証言している（文化人放送局）。

このように考えると、国防法調査団体に指定されている日本共産党に向いて講演し、「共産党に感謝する」と言った紀藤氏の立場は明らかに「反自民」かつ「親共産」という政治的スタンスであることがわかるだろう。